

—きのこ物件 1 — 名画の中のきのこ「七人の侍」—

七人の侍、黒澤明の著名な映画。この中にもきのこが登場します。ビデオで見ると2本目の約1時間目くらいの場面。

登場人物は、むちゃくちや強くて少しにひるな劍豪の久蔵（宮口精二）、若者侍の勝四郎（木村功）、そして芋侍の菊千代（三船敏郎）。劍豪の久蔵は、侍のボス役である勘兵衛（志村喬）が7人の侍を集めているところで、いきなり決闘シーンで登場します。

野武士の軍団と、7人の侍（この時点では6人）と百姓が、砦と化した集落の外と内で対峙している。野武士は火縄銃（映画ではタネガシマとよんでいる）を3丁もっている。この銃に困り果てた守る側。ここで劍豪の久蔵が「いかん、貴様は死ぬ気だ。俺がとってくる」と、闇のなか、部落の北面の暗闇の斜面を駆け上がっていく。その霧のたちこめる明け方、この劍豪が火縄銃を奪って、しかも2人切って帰ってくるのです。

その後、若者侍の勝四郎は、芋侍の菊千代にむかって、この劍豪のことを讃めるのです。ここが、きのこ物件なのですが、そのセリフ。「あのひとこそ本当のさむらいです。剛胆で、腕はすごいし、心は優しいし、それに種子島をぶんどってきたって少しも誇らないし、でかける時だって、あの敵がいっぱいいる山の中へ、まるできのこでも採りにいくように」と、言ったのには、いや驚いた。

それに対して、芋侍の菊千代が、「ああ、おもしれえ、おめえの話きいてるとまったく退屈しねえよ」と答えます。そして菊千代も1丁火縄銃を奪ってくるのですが、結局、最後の戦闘シーンで、劍豪も菊千代も、残った最後の火縄銃で死んでしまいます。勝四郎は生き残りますが。

少し説明がくどかった、ですか？ たった一言「まるできのこでも採りにいくように」。ご存じのこの映画、ビデオで見られます。私は買ってしました。（吹春）

原稿の送り方 キノコに関する情報を送って下さい。原稿は以下の要領で。

1. 電子メールで送る→吹春の個人メールへ RXL 11655@niftyserve.or.jp
2. 原稿を入力したフロッピーで送る（テキスト保存で、作業はマックです）→談話会事務局へ郵送
3. ワープロ打ち、あるいは手書きの原稿で送る→談話会事務局へ郵送

今年度から、編集委員会を編成しました。シリーズものなど企画していきたいと思います。キノコ物件はそのシリーズ第1弾です。情報をお寄せください。その他の原稿ももちろん募集しています。

* 編集後記 *

*マスタケを食べたいという話しある人にしたら、「マスタケは天麩羅にするとアンコウの肝のようでうまい！」とのこと。ぜひ、試したい。*30才にしてピアノを習い始めた。例の大人的のレッスン。楽しいけど、左手と右手の指を別々に動かすなんて！できない！ *会報を皆さんのお手元に届けることができてホッとしています。みなさんお元気でしたでしょうか。私は公私ともに大波にもまれてました。（R）

*昨年、暑いさなか、木曾福島にでかけたとき、ここにある京大理学部の野外施設の一室に川村多實二の写真が掲げてあった。同行した元理学部の西田氏によると、学部の大先輩だという。その時は知らなかったけど、表紙のことばにもあるように、多實二は川村清一の弟なのである。またこの木曾福島の施設は、留学先の米国で見聞したシラキュース大学附属の野外生物実験所を手本に、大津の臨湖実験所とともに、木曾生物学研究所として1933年に川村多實二自身により、森林溪流の生物研究のために設けられた施設だったのである。上野益三の紹介を引用するなら、川村多實二は「日本の動物生態学の創始者」なのだという。またその出身である津山藩からは幕末の蘭学の名家、箕作氏がでており、その箕作桂子吉は東京帝国大学の教授として川村多實二に動物学を教えたのだという。津山藩のそんな歴史が同郷の川村一家にもいろんな意味で影響していたのだろうと、上野はコメントしている。ふむむ。川村清一の著書である全8巻の原色日本菌類図鑑に関しては本会報第4号に腰野会長の味わい深い回顧談が載っている。この図鑑は、印刷、製版、紙型など東京大空襲で灰燼に帰し、疎開してかろうじて残った校正刷りと原図によって、著者の死後出版された執念の図鑑であるという。今なお日本を代表する菌類図鑑であり、中毒症状などに関しては今なお大リファレンスたる役割を果たす重要図鑑で、古本屋で出物があれば、お金がある人は是非購入されたし。私自身は自前でもつていいくけど。（参考）博物学者列伝（上野益三、八坂書房 1991），近代日本生物学者小伝（平河出版社 1988），生物学者小伝（小林義雄、探求と飼育 1987年11月号），植物一日一題（牧野富太郎 1953）（春）